

Introduction to Sophia Eagles

Sophia University ESS Debate Section Guide



Volume 1. Advantage of Debate

For Those Who Are Interested In Debate

Edited by

Sophia Forensic Union Eagles

2005

はじめに

新入生の皆さん、はじめまして。今皆さんは大学という新しい生活の場に希望を抱いていることでしょうか。授業はどれをとろうか、サークルは何に入ろうか、もしくはバイトをはじめようと言った具合に、やりたいことがたくさんあると思います。

大学は高校と違い、自己責任、自己管理で成り立つフィールドです。こう聞くと誰も助けてくれないようにも思えますが、逆に言えば様々な可能性を自らの意志で切り開くことができるということを意味します。つまり、大学生活を充実したものにするのも、はたまた空虚でつまらないものにするのも、言ってみれば皆さん自身の手にかかっているのです。それならば、地元という枠に収まっていた高校時代では出来なかったようなことを体験してみたいと思いませんか。

僕たちはたまたま英語ディベートという道を選択し、大学生活を楽しもうとしたに過ぎません。しかし、今僕たちは他の誰よりも濃密な体験をしていると自負しています。英語ディベートから得た能力、ディベートルाइフの中で出会った友人たち、それら全ての点において他のどのサークルにおいても経験できないような空間と時間のなかで生きています。大学生活を楽しみ、より成長するためのフィールドを、僕たち Sophia Eagles は用意しています。一緒に大学生活を走り抜けましょう！

Sophia Forensic Union Eagles 2004 年度チーフ
桜井啓太

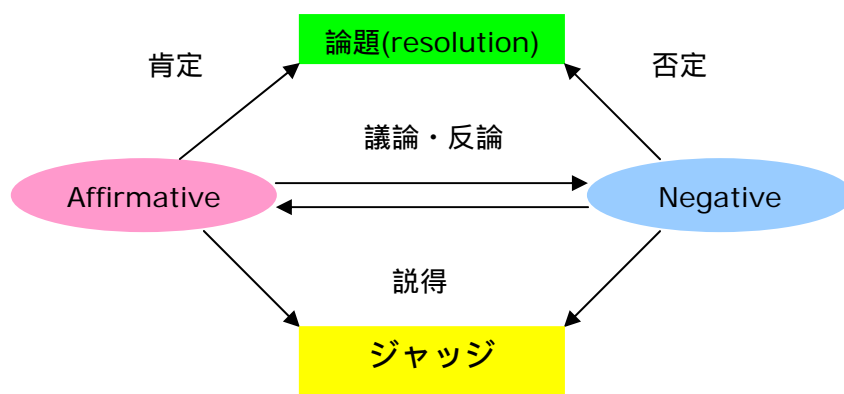
Chapter 1: ディベートで身につく能力

1. ディベートとは(簡単に)

ディベートは、ある論題(テーマ)のもとに、そのテーマが正しいと主張する肯定側(the Affirmative、以下 Aff)と、間違っていると主張する否定側(the Negative、以下 Neg)に別れ、お互いが議論しあいながら第三者である審判員(ジャッジ)を論理的に説得するゲームです。

例えば論題が、アメリカはイラクに軍事制裁を加えるべきだというものだとします。Affはこのテーマを肯定するためにイラク戦争による様々な利点を主張します。考えられる利点には、フセイン独裁政権を打倒し民主主義をイラクに浸透させる、大量破壊兵器の使用を未然に防ぐことが出来るなどがあります。対して Neg は、イラク戦争による不利益を主張します。例としては、攻撃により多くの民間人、軍人が死んでしまうなどです。大抵の場合は利益・不利益ともにあるので、最後は両者を比較し、自分の主張の重要性がより高いといえればいいわけです。最終的にジャッジを説得できた側が勝利となります。

この活動で養われる能力は、ジャッジに対しプレゼンテーションすることからくるコミュニケーションスキル、論題に関する資料を集め時事問題に精通する、相手の主張をうち破る批判的思考力、そして何より英語力です。それではこれらの能力を具体的に見ていきましょう。



2. コミュニケーションスキル

ディベートに習熟することでコミュニケーションスキルが改善されます。Semlak and Shields (1977)の研究では、「ディベート経験を持つ学生は3つのコミュニケーションスキル(分析力、伝達力、構成力)において、ディベート経験がない学生よりも優れている」と結論づけられています。また、ディベートはスピーチ能力を改善するばかりでなく、他のコミュニケーションにおいても私たちの助けとなります。グループディスカッションや対人関係なども上手くなります。Pollock (1982)の研究によれば、様々なディベート経験によってコミュニケーションスキルを鍛えられた人は、グループディスカッションにおいて仲間が高く評価されることが分かりました。ほとんど全ての国会議員は、学生時のディベート経験を対人関係スキル上達の間として重視しています。Pollock (1982)は、これらの研究結果により、スピーチコミュニケーションとしてのディベートの価値が具体的に立証されたとしています。

ディベートはプレゼンテーションで成り立っています。ただ考えるだけではダメで、自分の主張をジャッジにプレゼンテーションすることで初めて討論になるのです。ディベートの目的は相手を打ち負かすことではなく、ジャッジを説得することだということを忘れないでください。極端な話、どんなに良いことをしゃべっていてもジャッジが聞き取ってくれなければ黙っているのと変わりません。したがって、ジャッジという存在を常に意識しながらスピーチをする必要があります。聞き手にいかに分かりやすく「伝える」ことができるかを突き詰めるうちに、自然とプレゼンテーション能力が上がっていくことでしょう。さらに、全国大会の決勝戦ともなれば100人近くの観衆がいるので、人前でスピーチをする度胸がつき、緊張しなくなります。

3. 情報分析力・社会問題

ディベートをすることで、社会科学のさまざまな領域におけるより深い分析にとりかかることになります。論題は半期に1つ作られ、その度に背景知識について調べていきます。論題はホットな時事問題が選ばれますが、それはクローン技術、アジア共通通貨圏、地球環境問題、育児などに至るまで多種多様です。それらのトピックについて研究し、ディベートすることで、学生にとっては社会科学への道しるべとなるわけです(Robinson, 1956)。

大学では、一般教養科目を履修することはできるものの、ともすれば自分の専門分野に閉じこもってしまうことがあります。ディベートでは論題が社会問題についてであることが多いので、自然と時事問題や今までは全く興味の無か

った分野に敏感になります。ここだけの話ですが、私はディベートで得た知識だけで一般教養科目のレポートを書き上げてしまったことがあります。

加えて、必要な情報を的確に見つける力もつきます。ディベートではあなた自身の勝手な意見を述べてもダメです。客観的な証拠資料(Evidence)に裏打ちされた主張でないと受け入れてもらえません。よって、「こう言おう」と思ったならばエビデンスを探してくる必要があります。図書館はもちろん、インターネットの検索サイトなどを駆使して、どうにか欲しいエビデンスを見つけます。そこでは、目的の情報に効率よくたどり着くノウハウが学べます。3年の伊藤慎悟くんがリサーチのスペシャリストとして有名です。

4. 批判的思考力

ディベートの一番の魅力は、ものごとを批判的に考えるようになることかもしれません。Ehninger and Brockriede (1963)は、クリティカルシンキングは関連する事実や価値を注意深く吟味し、解釈することに基づいているとしています。それは、広く用意された選択肢に気づき、その結果や代替案を実行するのに必要なステップを認識することにつながります。Keefe, Harte and Norton (1982)によれば、クリティカルシンキングの能力はディベートによって身につけることができ、そしてそれはここ数十年にわたるさまざまな研究によって証明されています。

ものごとを一面的に捉えることは非常に危険であるということが出来ます。ある一部分を信じてしまったがために損をすることも数多くあるでしょう。重要なのは、あらゆる角度からものごとを見つめてみて本当にそうなのか自分で考え、検討することです。ディベートではあるテーマ肯定側と否定側を両方やるので、まずものごとには良い点・悪い点、どちらもあるのだということを知ることが出来ます。また、それぞれの側だけを見ても multiple に反論していくことが勝利につながります。ぜひ今までのような狭い一義的な視点から抜け出し、広い視野をディベートから身につけてください。このような視点を持っている人は案外少ないので、ディベーターであれば素人に口論で負けることはなくなるでしょう。

近年、インターネットやデジタル通信の普及に伴い、情報化社会が進展しつつあります。それ自体は便利で楽しいものなのですが、不可避な問題として情報の氾濫があります。情報はたくさん手にはいるのだけれども、どれを頼ったらいいかわからない。また、虚偽の情報というのもウェブ上には存在します。そこで重要なのは、自分で情報を選択していく力です。他人の言うことを鵜呑みにするのではなく、まずは自分で考え、その情報が本当に必要で有用なもの

なのかを吟味しなければなりません。ディベートで批判的思考力を学ぶことにより、氾濫する情報に流されず、自分自身の考えを持って論を進めていくことができるようになります。

5. 英語力

日本人は英語が苦手といわれます。中学、高校で6年間もみっちりやっているのに、一向にしゃべれるようになりません。それはどうしてでしょう。

答えは、英語を話す訓練ができていないということです。学校のカリキュラムで英語をどのように勉強していたかということ、文法だったり長文だったり、アウトプットをする練習をしていません。英語を話すためには英語を話さなければ上達するはずがありません。ディベートという活動では、英語をしゃべる量が半端ではありません。勝つためには少しでも多くしゃべらなくてはならないため、とてつもないスピードで英語が話せるようになります。逆に相手のとてつもないスピードの英語を聞かなくてはならないので、リスニング能力も上がります。しゃべり、そして聞くということについては、他のセクションで行える量よりもはるかに多いというのがディベートセクションの自慢です。

みなさんは上智大学に入学できるくらいですから、少なくともある程度の英語力は持っていると思います。しかしながら英語に限らず、上級者になればなるほど力が伸びなくなるという現象が往々にして生じます。そうした壁を打ち破るのに効果的なのが、ひとつのトピックについて繰り返し英語で研究をするということです。最初は難しい表現が多くても、同じトピックについて勉強し続ければ次第にそのトピックに関する知識が身につきます。これは最近英語教育に浸透してきた「テーマ・シラバス」という発想です。この点から、ある論題について一定期間にわたりリサーチを重ねるディベートは英語学習法として優れているのです(松本、2004)。

Chapter 2: 社会に役立つディベート

1. ディベートは就職に有利

これは私自身感じたことですが、ディベートをやっていると就職活動が有利になります。みなさんにとって就職活動はまだ3年ほど先のことで実感にはわかないかもしれませんが、就職活動では要するに自分を企業に売り込むことが必要となってきます。書類選考にはエントリーシートが主に用いられ、それには自分で記入します。学生時代力を入れたことは何かと聞かれれば、胸を張って「ディベートです」と答えられます。もちろんバイトや学業などもがんばってそれなりに成果を出しているのであればアピール材料になりますが、正直言って非常にありふれており、バイトに至ってはしたことの無い人はほとんどいないでしょう。しかし、ディベートであれば採用担当社員の目に留まることになり、今まで述べてきたような長所をアピールすれば希望の企業に就職できる可能性はグンと高まるでしょう。私もディベートをアピールし、行きたいと思える企業から内定をいただきました。

逆に、企業側の視点から見ても、ディベートは魅力的ということができます。アメリカの調査では、学生を採用する際に最も評価できる活動はディベートであるとする答えが一番多かったのです(Center, 1982)。単に学科の勉強だけをしていた学生に対しては、こうも簡単に良い評価は下りません。社会人として必要なのは文学の知識でもなく、経済理論でもなく、また力学でもありません。そこで求められるのは、自社の製品やサービスをどう売り込むか、実際にクライアントに接触してどんな主張ができるかといことなのです。勉強だけでは身につけることのできない能力を、企業は必要としているのです。

先輩ディベーターの就職先は事実、素晴らしい企業ばかりです。活躍したディベーターに就職先を尋ねると、たいてい有名・優良企業の名前が挙がります。ディベート経験を活かして社会人として活躍されている方々がほとんどなのです。調査でも、ディベーターが企業の役員に占める割合が高いとし、他の活動ではこれほどまで成功する人を輩出できないだろうとしています。

2. 営業職・コンサルタントになる人へ

上記のように、ビジネスマンとして必要なのは、商品・サービスを売り込む力です。そのためには自社の商品・サービスについて詳しく知り(リサーチ)、買ってもらうためのアピールポイントを整理し(議論の組み立て)、実際にお客さんを説得しなくてはなりません(プレゼンテーション)。また、コンサルタントであればお客さんが抱え込んでいる課題を的確に理解し(ディベート「inherency」の概念)、そのための解決策を提供(「solvency」)します。というように、ディベートで得られるスキルはそのまま営業スキルおよびコンサルテーション能力であり、社会に出た瞬間同期の社員に一步リードできるのです。

3. 弁護士・裁判官になる人へ

ディベート経験が将来法律を仕事にしようとしている人にとって役立つことは、非常に主流の考え方です。Arnold (1974)の調査では、94人の弁護士を対象に調査したところ、ディベート経験のある62%と経験のない53%の人たちが「全ての法律学部生にディベートを強く勧めたい」と語っています。さらに、69.9%のロースクール学長がディベートの授業を取ることを、70.3%がディベートセクションなどに所属してディベート活動をすることを推奨しています(Swanson, 1970)。なぜこれほどまでディベートが重視されているかということ、それは過去のディベーターたちが法曹で活躍しているからに他なりません。

4. 代議士・官僚になる人へ

立法や政治の分野でディベートがどのように寄与しているかを調べてみても、ポジティブな意見が多くあります。例えば、フロリダ州議会で活躍している議員ほど、過去にディベート経験があるという強い相関関係が示されています(Pollock, 1982)。アイオワ州議員ディック・クラーク氏は、「ディベートの主要な価値は、論理的思考を鍛え、自らの立場を明示する能力が身に付くところにある」と語っています(Huseman and Goodman, 1976)。さらに、フロリダ州議員チャールズ・E・ベネット氏は、ディベートは公衆の面前でスピーチをする訓練になるばかりでなく、思考過程をより優れたものにするとともに言っています。

またディベートでは政策の是非を問うことが多いのも特長です。論題を具体化し、論題を代表するような政策をAffが提示します。Negはそれに対し、政策としての弊害や政策自体の実効性について反論します。これらのプロセスは立法や行政の場で行われていることとほぼ同じ事です。大学を出てそのまま政治

家になる人はいないかもしれませんが、大学を出てしまうとディベートを訓練する場というのはかなり限られてくるでしょう。したがって政治家になりたいと思うような人は、いまディベートをすることが必要になってきます。

5. 研究職・教授になる人へ

将来研究職などにつく人にとっては、まずディベートのリサーチ能力が役に立つでしょう。何にせよ、情報は十分に得ておかないと良い研究はできません。

学問の基本は比較であると言われます。何かと何かを比べることが研究の始まりとなるということです。ディベートでは利益と不利益を比較するばかりでなく、相反する議論が提出された場合、それら 2 つの説を比較検討して自らの主張を貫いていくことが重要です。よって、ディベートをすることで研究者としての視点を身につけることができます。また、時には自分の研究成果を客観的に見つめなおさなければならない場合もあります。なぜなら、あまりにも偏った考え方からものごとを論じていても良い研究とは言えないからです。こんな見方もある、あんな見方もある、ではその中で何がもっとも良いのか。そういった思考ができる研究者に、ディベートを通じてなって行ってください。

Chapter 3: ディベートセクションについて

1. セクションの雰囲気

ディベートのシーズンは前期・後期とあり、それぞれ3月末～6月末、8月末～12月といったスケジュールになります。シーズン中の週末は必ず日本どこかでディベートの大会が開催されています。必ずしも関東でのみ行われるわけではありませんが、もし上智大学 ESS ディベートセクションから大会に出場する人がいればみんなが大会会場へ集合します。したがってセクションのメンバーとは週末に顔を合わせるのが普通です。ディベートセクションは他セクションのように定期的なコースはありませんが、実質毎週のようにコースがあるというわけです。

大会が終われば飲み会を開きます。基本は出場した人を労うのが目的ですが、みんなで騒ぐのが真の目的となってしまうような気がします。飲み会や日々のセクションの様子を表すならば、「馬鹿笑い」という言葉がぴったりです。お互いにネタを上げていじりいじられ、笑いが絶えません。

また、大会前は泊まり込んで準備を手伝ったりします。ディベートは「これだけやればいい」とか「自分がベストを尽くせば OK」といった活動ではなく、常に対戦相手の他大学が何をやってくるのかを分析し、それを上回る論理の反論を準備しておかなくてはなりません。これはスピーチセクションのような個人 VS 個人の戦いではなく、大学全体で競い合うということになります。よって自分が出場しない大会だとしても協力し合って準備を進めていかないと間に合いません。他人のために一晩を費やすことのできる、そういった人々の集まりがディベートセクションでもあります。

2. 他大学との交流

先ほども述べたように、週末には必ずといっていいほど大会会場へ足を運びます。ということは、自分の大学だけでなく他大学の人々とも毎週顔を合わせることになります。自分が出場する際にも必ず対戦相手がいるので、それらの大学の人々と交流を深めることができます。

さらに、ディベートは各大学がホストとなって開催される大会よりも、各大学の枠を飛び越えてコミッティーを組織し、大会をマネジメントしていく形の方が多いです。引っ込み思案でいるのではなく、積極的にそういったコミ

ッティーに参加していけば、自然と人脈も広がっていくことでしょう。今年でいうと、3年の村上明くんや2年の荒友香里さんはディベートセクションの中でも顔が広く、他大学の人々にも有名です。

他大学のディベーターも優秀な人ばかりです。大学名を挙げて、東京大学、早稲田大学、慶應義塾大学、同志社大学など、有名上位大学の人々がディベートという活動に取り組んでいます。高い次元にいる人々と高い次元の活動・ディベートをするなかでお互い高めあうことができるのもディベートの魅力です。せっかく大学生になったのだから、日本中の優秀な人々の間に身を置くことで、どんどん自分を成長させていってください。

3. 大会成績

上智大学 ESS ディベートセクションは伝統のあるスクワッドです。先輩たちのディベート成績を見ても、毎年のように全国大会優勝をしています。最近では、昨年12月に行われた NAFA Tournament(全国英語討論連盟主催全国英語討論大会)優勝や、9月の上智大学招待英語討論大会(文部科学大臣杯)準優勝など、全国トップレベルにいます。今年に入っても全国規模である春の二人制ディベート大会で準優勝と、今までと同様勝ち進んでいます。巷では「英語の上智」と呼ばれるくらいですし、上智大学 ESS ディベートセクションは伝統ある強豪として名を馳せています。どうせ上智大学に入ったのですから、上智としてのアドバンテージを活かせるディベートに取り組んで日本一を目指してみませんか。

■ おわりに

これらの利点は、ディベートセクションに入るだけで身に付くものではありません。ディベートという活動を通じて自分を高めていく努力をすれば身に付くものなのです。また、もしかしたら上記の能力はディベートで身に付くというよりもディベートで勝つために必要な能力なのかもしれません。だとすれば、ディベートで勝つことを目指す中で自然と身に付くはずで

以上、ディベートという活動に取り組むことによる色々な利点を書いてきました。これだけを読むとディベートがただただ素晴らしい活動に思えてくるかもしれません。ただ、ディベートセクションに入る前に考えて欲しいのは、みなさんそれぞれにとって向いている活動は、もしかしたらディベートではなく、スピーチ、ディスカッション、ドラマであるかもしれないということです。他のセクションの話も聞いて、それでディベートセクションを選んで頂ければ幸いです。さらに、ディベートは対価が大きい分、なかなか大変な活動です。ちょっとやそっとのコミットでは結果を出すことが難しくなってくるかもしれません。しかし、ディベートは努力した人が報われる活動です。大会のための準備をすればするほど、スピーチの練習をすればするほど、試合で勝てるようになり、コミュニケーションが上達します。ともにがんばり、ディベートから何かを学ぼうとする努力が出来る人を、私たち Sophia Eagles は大歓迎します。

Reference

- Arnold, W. (1974) "Debate and the Lawyer." *Journal of the American Forensic Association* 10: 139.
- Center, D. B. (1982) "Debate and the Job Market." *Debate Issues* 15: 4-6.
- Ehninger, D. and Brockriede, W. (1963) *Decision by Debate*. New York: Dodd, Mead.
- "100 of 160 Leaders Began Careers as Student Debaters." (1960) *Freedom and Union*. 6-7.
- Huseman, R. C. and Goodman, D. M. (1976). "Editor's Corner: BYD Congressional Questionnaire." *Journal of the American Forensic Association* 12: 226.
- Keefe, C., Harte, T., and Norton, L. (1982) *Introduction to Debate*. New York: Macmillan.
- 松本茂 (2004) 「速読速聴・英単語 Advanced 1000 ver.2」増進会出版社
- McBath, J. (1961) "Speech and the Legal Profession." *Speech Teacher* 10: 44-47.
- Pearce, W. B. (1974) "Attitudes Toward Forensics." *Journal of the American Forensic Association* 10: 139.
- Pollock, A. (1982) "The Relationship of a Background in Scholastic Forensics to Effective Communication in the Legislative Assembly." *Speaker and Gavel* 19: 17.
- Robinson, J. (1956) "A Recent Graduate Examines His Forensic Experience." *The Gavel* 38: 62.
- Semlak, W. D. and Shields, D. (1977) "The Effect of Debate Training on Student's Participation in the Bicentennial Youth Debaters." *Journal of the American Forensic Association* 13: 194-96.
- Swanson, D. R. (1970) "Debate as Preparation for Law: Law Deans' Reactions." Paper presented at the annual meeting of the Western Speech Communications Associations.

Tournament Schedule

- 4月9、10日 春の二人制ディベート大会予選
- 4月17日 春の二人制ディベート大会決勝トーナメント
- 5月1、2日 AYAME
- 5月8、9日 Japan National Debate Tournament 東日本予選
- 5月15日 Japan National Debate Tournament 全国大会予選
- 5月16日 Japan National Debate Tournament 全国大会決勝トーナメント
- 5月30、31日 Tokyo Intercollegiate Debate League 予選
- 6月7日 Tokyo Intercollegiate Debate League 決勝トーナメント
- 6月13日 East West Debate Tournament 予選
- 6月14日 East West Debate Tournament 決勝トーナメント
- 6月20、21日 Sophomore Educational Exchange Debate

大会見学がしたい方は、気軽にディベートセクション員まで問い合わせてください。

Contact Us

著者: 桜井啓太 Sophia Forensic Union Eagles 2004 年度チーフ
2002年 上智大学文学部心理学科入学
2003年 All Japan Debate Tournament 第3位
2004年 NAFA Tournament 優勝
2006年 インターネット広告代理店に入社予定

ご質問がありましたら以下の連絡先までお問い合わせ下さい。

2005 年度チーフ 石毛政也

E-mail Address: masaya.-sophia-@ezweb.ne.jp

2004 年度チーフ 桜井啓太

E-mail Address: legendary_wave@docomo.ne.jp